

## 熊本地震から考えたこと

二〇一六年四月二十日

バイブル・サービス

### 家 子 敦 子

熊本地震が起こって一週間がたちました。熊本では、いまだに余震が続き落ち着かない毎日を過ごされている方がたくさんいます。ここからはとても遠い地域ではありますが、皆さんも大丈夫だろうかといつもよりニュースを見る機会も増えたのではないのでしょうか。これ以上の被害が広がらないこと、そして何よりも犠牲になられた方々のご冥福をこころから祈るばかりです。

そして、仙台では募金や救済物資の呼びかけがあちこちで始まっています。皆さんの中にもすでに何かに参加した方もいるのではないのでしょうか。

そして、それと同時に私たちも五年前、同じようなと言っているのかわかりませんが、…そのときのことが見えなかった方もいるのではないのでしょうか。

さて、あれから私たちはあの3・11という出来事を風化させないために、またこの経験を教訓にしてなどメディアでも取り上げられ、そのときの映像が今でも何度も流されることもあります。また防災に備える観点から、携帯電話やスマートフォンを活用した防災に関する情報などは、いち早く共有できるようにするなど目覚しく進歩

した事や、自治体での危機管理体制、企業等においても地域に見合った対策などが充実したように見えます。また今回の熊本にも早々に自衛隊や医療職のチーム D m a t o がいくつも派遣されましたように、一次支援の方法も大きく充足されたのではないのでしょうか。もちろん今メディアで言われているように、支援の手やサポート体制などは百パーセントの人が満足いくものではないかも知れません。しかし、3・11の教訓を生かしてあのときよりは対応できていることもたくさんあるように見受けられます。新たな課題が指摘されていますが、以前よりはよい方向に変わったということもあるのではないのでしょうか。

それでふと考えました。では、私自身、あの3・11東日本大震災から五年、今日までやってきたけれど、あの経験で学んだこと、今の自分に生かしていることはなんだろうと考えました。

皆さんは、中学生くらいの出来事でしたか？ 私自身無理して変わらなければと思っっているわけではありません。しかし、あれだけの体験をしてあれだけのショックを受けて自分自身が何も変われないと思うのはとても残念なことのように感じました。

今熊本で起きていることを見ていて、ただ遠くから見ているだけの自分がとても切なくなっていました。今すぐ熊本に行くことはできないけれど、でも、私たちもあんな大変な体験をしたのだから、何かできることはないのか、熊本の方々に直接貢献はできないかも知れないけれど、何か今いるここでもできることがあっていいのではないか。そして、あの3・11という経験で学んだこと、今の自分に生かしていることはなんだろうと改めて考えたいです。せめて前に進むとか成長できたのではないかとかいうことが私自身あるのだろうかと思いたくありません。

あれから今日までどうにか生きてきましたか？、皆さんはどうですか？3・11を教訓にして、今の生活で自身が

変わったことはありませんか？

…あの時私たちが失ったものは、たくさんの人たちと当たり前前の生活、日常でしたね。それもあつという間に一瞬で。

直接被害にあった方はもちろんのこと、被害の少なかった人たちでさえ、あの震災で失われたあらゆる人やもの、あのときの私たちの喪失感、それは本当に大きなものだったのを覚えています。あのときほど、何気ない日常にあるすべて人やものがどれだけ私たちの生活を支えていてくれたのだと切に感じたことはなかったのではないのでしょうか。

まあ、我が家のことで恐縮ではありますが、私には主人と子供たちがいるわけですけど、…あのころは長女は遅い反抗期が始まったばかりで、まともに話もできないと我が娘ながらうんざりしていたころでもあったんですね。ところがあの地震が起きて、さすがにあの事態でしたから、あの長女でさえも何ともとても協力的でしたね…驚くほど変わりました、一時的にでしたけれど。この春、社会人として自立していききました。いまだに反抗期で、もう二度と家には戻らんとぞ、という勢いで自立していききましたけども、だけど本当は働き者でやさしくて、こつこつ努力する子だということをあの時思い出させてくれたのを覚えています。

皆さんにもあの時は家族のことに限らず、人の大切さ、ありがたさが身にしみる出来事が、あったのではないのでしょうか。またどこでも携帯の充電などにも苦労していましたが、そもそも携帯電話って、人と人をつなぐものですよね。携帯の充電に奔走するということ事態が誰かとのつながりを切らないようにしているわけですよ。

ここで話は変わりますが、最近はとても暖かくなりました。この大学構内に咲く桜の花は楽しみましたか？ 楽しむというのは、どんちゃん騒ぎをするということではありません。私は、大学の駐車場から構内に来る途中の満

開の桜を、毎日見えています。とてもきれいだな、そういうえばお花見なんて数年してないな、なんてことを考えながら毎日見えています。

ところが、今回の熊本地震の後、私は桜の花を見て立ち止まったんですね。そして桜の木の下に咲くタンポポや雑草などにも目が留まり、そして今年もこの桜の花を見ることができたこと、タンポポを見ることができたことは「奇跡」なのではないかと感じ、感謝しないといけないとさえ思いました。今自分がここで生かされている、そして何とか生きていける環境を与えてもらっているということに感謝しなければと思いました。∴改めて思いました。そう思わせてくれたのが私たちにとっては、あの3・11という体験だったのではないのでしょうか。それを私はいつの日か忘れて生活していたように思います。

情けない話ですが、先週熊本地震が起きた日、私は主人と実はけんかしていたんですね。それも原因はトイレトペーパーのことで∴。本当に情けない話です。

3・11でも熊本地震でも犠牲になって亡くなってしまった方がたくさんいらっしゃいます。その方々のことを思うとトイレトペーパーごとで怒っている自分が本当に情けないと思いました。

∴しかしそう思ったときにふと、「亡くなる」、「人が死ぬ」ことを「犠牲」∴犠牲者であることは間違いないのですが、でもそんな言葉で片付けられるものなのかと疑問に思いました。

私は授業の中で、終末期ケアについて担当し話しています。その中で、人間は死亡率百パーセントなんだと話しています。それはそうなんです。人は死にます。でも死に方はさまざまです、今回のような自然災害であったり、交通事故であったり、∴病気であったり。死期だけは自分で決められず、突然やってきたり、徐々にであったり。いずれにせよ去り行くものも残されたものも本当につらいものです。でもそれは「犠牲」とか「かわいそう」とか

言う言葉で表現してしまっているのだからと改めて考えました。

さてここで大津秀一という方の書いた『死ぬときに後悔すること25』という本の一部を紹介させていただきます。ここに出てくる十七歳の少女というのは白血病でも余命の残されていない状況です。その少女の記した手記からのお話です。読ませていただきます。

「自分の生が、死が、意味あるものでありたいと思う」と記した。

これは本当のことだ。そして切実なものでもある。誰もが、自分の生や死が意味あるものであることを願っている。

生が無意味なら、人は死ぬしかなくなる。死が無意味なら、人の死は無駄死にだと感じる。だから人は生と死の意味を求めてやまないのである。それが無意味であることを恐れている。

けれども一方で、生と死の意味を見つけることは難しいことである。

私自身は、生は他者の生との関連性の中で存在していると感じている。人は一人では生きられないというのもそうだし、人は孤独のようでも誰かとつながっていると常々思うからだ。

十七歳の彼女は「少なくとも私も私にとってあなた方の生は意味あるものであるだけではなく、なくてはならないものとして存在している。

あなた方は、勇気ある強い人間だ。あなたは人を救ったのだという満足感と自信にあふれて生きていてほしい。あなたは私にとってなくてはならない人です。そう思ってあなたに心から感謝と尊敬をしている人がいることを忘れないでほしい。」と書いた。

熊本地震から考えたこと

ここから読み取れるように、他者の存在自体が、彼女の生を、そしていくばくかの死を救ったのだ。そしてまた一方で、彼女の存在がどれだけ他者に影響を与えたかわからない。要するに、お互いがお互いを助け合っているのだ。

私は生のひとつの意味は、自分を残すことだと感じている。かつてある本に記した「人はその生き方を他者に刻むために生きている。」というやつである。(中略)

一ついえることは、死ぬ前までに生と死の意味を自分なりにある程度確信していなければ、つらいかもしれない現実があるということである。

いや実際に、それをあまり考えることなく死期が迫った人は、戸惑うのである。

生きていることが単純に幸せで、死ぬことが単純に不幸なら、人の生涯は最後に不幸が来てそれで確定となってしまう。そのように考えるなら、人生は最後に必ず負け戦で終わるもの、あるいは究極的には喪失が連続する体験ということになってしまっただろう。

また、もし死の意味を見出しえなければ、死は大きな恐怖となって眼前に立ちふさがらるだろう。

(大津秀一『死ぬ時に後悔すること25』)

私も人の死は無意味でもないし、負け戦でもないと思います。亡くなった方の死の意味あるものにするかしないかは私たち次第なんだということです。それは誰でもがわかっていることだと思えます。そして3・11を経験した私たちはなおのことそのこと身をもって感じたはずなのです。それなのにトイレットパーパーごときで怒る自分は、そのことを日常の雑踏の中で見失っていたとつくづく思いました。そのことに気づいたとき私は立ち止まり、タン

ポポを見ることが出来たことに感謝できたのだと思いました。

今、私はすぐ熊本に行って直接何かできることはないけれど、でも支えてくれている周りの人に感謝し、毎日毎日を大切に過ごすこと、目が見え耳が聞こえ自分の足で歩けること、たくさんのものを与えられ生活できていること、いまだに反抗期の長女が自立できたことなどですね、たくさん感謝することがあり、そして遠いこの宮城の地で、何度となく大きな嵐が向かってくることも多々ありますが、前を向いて生きていくことこそが大切で、今の私には熊本の方々に對して出来る唯一のことなのかなと思っただ次第です。ありがとうございます。

(心理福祉学科専任講師)